

「子どもダカラ・・・」

文化構想学部一年 酒井 颯太

「塾に行くことも、受験することも諦めて！」

模試の成績が帰ってきたある日、母は私にそう言いました。

いつも働いている母。母子家庭で金銭的な余裕がない中、憧れの中学に行くため、塾へ通えることは家計にとってギリギリでした。

そして、とうとう母は苦渋の決断をしたのです。

頑張っているのに成績が上がらない自分へのもどかしさ。

お金がないという現実。

諦めたくない！最後まで、頑張りたい！でも、その思いは叶わない。まだ、小学生だった私はただただ悔しくて、泣くことしかできませんでした。

しかし、そんな私を当時通っていた塾の先生は信じ続けてくれました。

「絶対伸びるから、信じてあげてください！」

先生は毎日のように、母に電話をし、僕のため説得してくれました。

そして、何度も僕のために夜中まで付きっきりで指導をしてくれました。

結果的に私は受験をし、受かった中学で、今の夢を見つけ、勉強に励むようになったのです。

しかし、ふと思うのです。

あの時、先生が母を説得してくれなければ、私は「お金がない家に生まれた」、ただ、ただそれだけの理由で、夢に向かって努力をしようとするどころか、夢さえもつことができなかったかもしれないと・・・

子どもはとても素直な生き物です。彼らは世界をありのままに受け止め、それを繰り返すことによって、徐々に徐々に「自分」という存在を形づくっていきます。

そんな彼らにとって生まれた環境、そしてそこでの過ごし方は一生を左右するものとなります。だからこそ、「お金のない家に生まれた」そんな理由で、子どものもつ無限の可能性が狭められることはあってはなりません。

「かえるの子はかえる」ということばがあります。子は結局、親の辿った道を歩むという意味です。しかし、たまたまこの親の元に生まれたか、たったそれだけのことで、自分の人生が決められる、そんなことがあってよいのでしょうか？

今年の7月「子どもの貧困」率が過去最低になったというニュースが世間を騒がせました。現在その数は約6人に一人に上り、その率は年々上昇をつづけています。

そして、この「子どもの貧困」こそ、まさしく、生まれた環境によって人生を決められる最

たる例なのです。

「子どもの貧困」はなぜ、問題なのでしょう。まず、真っ先にみなさんが思い浮かべるのは、塾や家庭教師、高校や大学への進学などの、経済的な事情ではないでしょうか。しかし、この経済的な障壁は、近年解消されつつあります。現在、日本の初等・中等教育では、学力だけではない、芸術や情報などのさまざまな種類の科目に触れ、大学などの高等教育ではそれらの幅広い分野を探究できるようになっています。そして、これらを受けるための環境も、進学、私教育の両面から整備されつつあります。進学に関しては、高校無償化や2018年度からの所得連動型奨学金の導入が決定されました。加えて、私教育に関しても現在格安のインターネットを通じた授業がNPOや企業を中心に多く行われるようになっていきます。

しかし、「子どもの貧困」の本当に恐ろしい問題は、そこではないのです。それは、貧困によって、目の前のあらゆることに興味、関心を抱くことや、夢や目標に向かって頑張ろうとする意欲をそもそも持てなくなってしまうことにあるのです！これは、経済的な障壁にあたる前の根本的な問題であるにもかかわらず、解決の兆しが一向にみられません。

事実アンケート調査によると、貧困層では、「何事も頑張れば報われる」「自分の将来が楽しみ」と考えている子どもの数は、一般家庭のたった半分しかみられなかったことがわかっています。彼らは自分に大いなる可能性があることをわかっていないのです。このような、将来への期待の少なさは自分に対する自信の低さから起きます。加えて、知らないことについて学ぼうとする意欲をもっているかどうかについても、貧困層の子どもは一般家庭にくらべ、20%近くも低いことがわかっています。また、別の調査では、将来の夢を持っているかどうかについて、他の層がほとんど変わらない中、貧困層の子どもが突出して、「夢がない」と答えているのです。

それでは、このような問題は どうしておこるのでしょうか？

その原因として、まず一つ目に就学前教育の不徹底があげられます。就学前教育は子どもの意欲や自分への自信に大きな影響を及ぼすことがわかっています。調査によると、就学前教育を受けさせた子どもは、受けなかった子供に対して収入や学校中退率、生活保護受給率において倍以上のよい結果を残していることがわかっているのです。そして、脳科学の見地からみても就学前教育が子どもの自信、学ぶ意欲や好奇心の向上に大きく貢献することがわかっているのです。

しかし、現在教育機関である「幼稚園」に通っている児童数は、全体の半分ほどしかいません。反対に、多くの保護者とりわけ貧困家庭は、そもそもどこにも通わせていない、または子どもを遅くまで預けられる保育園に通させているのです。保育園は児童養護施設であり、教育機関ではありません。設立の目的も、カリキュラムも大きく異なります。このように、現在日本において、貧困層の子ども達に対する、おおきな効果を持ちながら就学前教育は十分に行われているとは言えないのです。

二つ目に、貧困家庭における養育の質の低さがあげられます。調査によると、家庭の経済状況は、親の子どもに対する関心やかかわり方、教育方針に大きく影響をあたえることがわかっています。加えて、子どもと一緒に過ごす時間も貧困家庭では、一般的な家庭よりも倍近く下回ることがわかっています。発達心理学において、親だけに限らず、特定の大人や仲間が子どもと正面から向き合い、一緒に時間を過ごすことは子どもの成長に必要な不可欠とされています。自分を認めてくれる他者の存在は子供に安心感をあたえるのです。実際に、こういった安心感は子どもの自信や意欲に効果があることが調査によって証明されています。

以上のような原因に対して、私が提示する政策は二点です！

一点目は、幼稚園、保育園の一体化及び無償化

二点目は、少人数制教育の徹底です。

まず、一点目の幼稚園と保育園の一体化及び無償化について。

先ほども述べたように、幼稚園は国が定めた教育機関なのに対し、保育園は子どもを単に預かる児童養護施設です。この二つはそもそも設立の目的が違い、教師の資格もカリキュラムも大きく違います。しかし、現在待機児童の問題にも見られるように、子どもを保育園に通わせる親の数は、貧困家庭を中心に年々増加しています。このような、状況に対して政府は幼保一体化の政策として、認定こども園の創設をおこなっています。認定こども園とは、幼保機能をどちらももった総合施設をさし、すでにある幼稚園への保育機能の追加や、その反対を行うなどして設置されます。現在ある幼稚園にも子どもを長時間預けられることから、待機児童にも効果があるとされており、広く子ども達に就学前教育をうけさせることができます。しかし、この認定こども園は今、当初の予定よりも設置が大幅に遅れています。それは、幼稚園は文部科学省が、保育園は厚生労働省が管轄しており、財源や申請に際して、縦割り行政の弊害があることに起因します。そこで、就学前段階の施設に関して、管轄を文部科学省へ一本化します。就学前段階の子どもへの、教育を徹底するのです。そして、全ての子どもがこういった幼児期の教育を受けることを可能にするため、所得制限を設けた上で、就学前教育の無償化を行います。

次に、就学前段階及び義務教育段階における少人数教育の徹底を行います。

養育の質や子どもとの時間の低下などのそれぞれの家庭の問題に左右されず、子どもが他者と安心した時間をすごせるのが学校です。しかし、現在日本の学校では、一つのクラスの子どもの多さから、教師がひとりひとりの生徒と多くの時間を過ごし、寄り添うこと。また、子ども同士が互いに多く触れ合うことが難しくなっています。事実、日本のひとクラスの平均人数は子どもの教育に、最も効果があるとされている数の倍近くあるのです。そこで、

単なる学習指導の効率化だけでなく、子どもの安心できる環境づくりの点から、少人数教育の拡充を行います。少人数の学級編成を大幅に取り入れた山形県でのプログラムによると、少人数教育を導入後、単なる学力の向上だけではなく、欠席率や不登校が大幅に減ったがわかっているのです。これは、子ども達の学ぶことへの意欲や教師や友達などの信頼関係の向上からきているのです。

夢を叶えたその先にあるのは、きっと、突き抜けるような紺碧の空でしょう。

その中を自由に、優雅に飛ぶ鳥になれたらと、蛙の子はいつも思うのです。

しかし、彼らは気付いていません。蛙の親から生まれた子が、蛙のまま生きなければならぬと、誰が決めたのでしょうか。

自らの可能性に気づいたとき、茂った草の中でしか飛べなかった蛙の子も、きっと翼を生やし、大空へと羽ばたいていくことができるのです。

では、彼らに翼を与えるのは何でしょうか。それこそが親です！学校です！！社会なのです！！

今こそ、それらの体制を整え、子どもの無限の可能性をひらこうではありませんか。

ご清聴ありがとうございました。